慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中國洪水傳説の諸相
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.72(208)- 92(228)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯東亜文明の始源
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中國洪水傳說の諸相

松本信廣

（一）

中國の神話が他國に比して乏しく、中國民族はギリシア人の如き神話的體系を持たぬと口癖の樣に云はれてゐたが、今日吾々の間に傳へられてをる古代傳承は、「怪力亂神を語らず」と云ふ樣な儒教の徒により荒唐無稽な分子が除去せられ、史實化し道德規範化した所謂「經典」を通じて保存されてをるのであり、かように整理された文獻を通じて古代世界を窺ふと成る程中國人はギリシア人や我國人に見る樣な神話的世界に惠まれてゐないかの印象を與へられる。然し中國が今日の文獻によつて窺はれる古代傳承の體系に到達する前に更に長い長い過去を經過したことを考へにいれ、その間中國平原に興亡起伏した幾多の王朝、部落國家の消長を推定すれば、中國人祖先の經過した神話的世界といふものが意外に豐富な內容に惠まれてゐたかも知れないといふことが想像されて來る。河南省の安陽は殷の都址といはれてをるが、此處から中國の考古學者により發見された虎頭人身の大理石像とか甘肅の新石器時代末の遺跡からスエーデンの考古學者により發掘された彩陶壺の蓋に見ゆる蛇の後頭に纏ふた人頭の把手など孰れも或る種の神話的の人物を表現してゐると推定されるが、それが如何なる神話と關係あるかは未だ充分に明かにされてゐないのである。今日文獻によつて傳へられてをる神話的分子が如何にも僅少であり、これにより中國古代文化の中に占むる神話的世界を推論することは如何にも至難の事柄と觀ぜられるが、此の困難を乘り切つて現在存する文獻に基いた此種の研究を一應整理し、此の方面より古代中國民族の性質を究明する一助となさんとする企圖は、中國古代文化史研究に必要な豫備的課程であると信ずる。

（二）

先づ第一に論じなければならぬのは、中國の古傳承の中に大きい役割を演ずる所謂「洪水傳說」である。フレーザーは、その「舊約聖書中の民俗」[二]第一册ロンドン一九一八に於て洪水傳說の世界に於ける分布を示し、その中シナの洪水傳說はノアのそれとは系統を異にし、黃河の地方的洪水が基礎となつて生じた傳承であらうと論じてをり、出石誠彥氏はその「上代支那の洪水說話について」（「東洋學報」十九卷三號・昭和六年十二月「支那神話傳說の研究」昭和十八年所收）の中フレーザーの意見に贊し、前漢より唐末に至る洪水年表を作り、歷史時代の洪水の慘害極めて多く、中に黃河より受ける所至大であることを示し、恐らく黃河の緣邊でその農業生活を展開した原始漢氏族はその慘害に惱まされ、極めて幼稚な說話の形式で洪水の恐るべき事が語り繼がれ、やがてそれが帝王の治水說話として知識ある人々の間に重要視せられ、禹の功業として上代記錄に主要なる位置を占めるに至つたことが推知せられようと論じ、中島成明氏「支那古代洪水傳說の成立」（「支那學」十卷三號昭和十六年八月）に於てもシナ洪水說話のシナ特有の地盤を有すること、國の中央に黃土層を貫流する大河を控へ、屢々その氾濫に惱まされた特殊な地理的還境がこの傳說發生の契機を含むこと、また堙塞といふ治水の方法より決疏といふ方法に移る過程に原始農耕文化の形態が反映せられると論じてをる。これに反し佛のアンリ・マスペロ氏は、その「書經中の神話的傳承」[二]佛國アジア協會雜誌一九二四・一月—三月に於て之を東亞民族に共通な宇宙創成神話の一形式であると見てをる。今氏の意見を略述すると次の如くである。

古代シナの傳承的歷史中に重きを占める大洪水と之を止める爲必要であつた大治水工事の物語をノアの大洪水說話に比する慣はしが古來行はれてゐたが之は適當でなく、シナの傳說には聖書物語に見える人類の罪と之に對する神の責罰といふ觀念全くなく、又後者に於て增水と洪水それ自身に重點が置かれてをるのに中國に於ては漲溢した水を河を穿つて排水し、中原を住みよく、耕作可能にしたことに主眼が置かれてをる。此の排水と耕地化の主題があらゆる傳承中に取扱はれてをり、古い中國の神話が殆ど全く喪失せるに拘らず、史實化された傳承中に少くとも次の六種の異傳を見分けることが出來る。その第一は禹の傳說であり、大體次の如き筋に要約することが可能である。

「古へは龍門未だ開かれず、呂梁未だ鑿たれず、河は孟門の上に出で（尸子　太平御覽四十　淮南子八）「洪水天に滔り、浩浩山を懷み、陵に襄り」（益稷）鯀之を治めることを命ぜられ、（堯典）龜と鴟とが之に堤防を築くことを敎へた。（天問　梵辭補注三）しかも水は之に應じて增すばかりであり、そ

こで彼は上帝の生ける土「息土」をぬすみ、以て洪水を堙がんとし、（山海經十八）帝怒つて祝融に命じて鯀を羽山に殺す（山海經十八）鯀死して三年腐ることなく、之を割くに吳刀を以てし、以て禹を出だした（歸藏　初學記廿二）鯀は化して黃能となり、羽淵に入る（左傳昭公七年）帝乃ち禹に命じ、土を布き以て九州を定めしめた。禹は雲雨の山に雲雨を攻め降し、（山海經十五、十八）洪水を堤防によつて治めずに、排水によつて治めんとした。その工事が永びき、その間彼は熊の形に變じ、妻塗山の女は日々禹が鼓を鳴らすと食事を運んでゐたが、或時禹が石を落下させたのが誤つて鼓に中り、塗山氏往いて見ると禹方に熊に變形してゐた。塗山氏慙ぢ恐れて嵩高山の下に至り、石と化す、其時彼女はまさに啓を生まんとしてゐたので、石はその儘大きくなり、九箇月にして禹刀を以て之を剖いて啓を出だした。（淮南子　楚辭補註三引用）禹は遂に龍門を鑿ち、孟門の峽を開き、水を疏し、（尸子二、呂氏春秋五）次いで伯益民に漁獵を敎へ、上帝后稷を異常生誕させ、之が民に耕作を敎へ、（益稷、詩經大雅生民）禹と后稷は共に王朝の祖となつた。（史記　二・四）

第二は臺駘傳說で、「昔金天子裔子あり、味と曰ふ、玄冥の師と爲り、允格と臺駘とを生む、臺駘は能く父の官をつぎ、汾水と洮水とを通じ、大澤を堤防を以て圍み、以て太原を住地たらしめた。帝もつて之を嘉し、諸を汾川に封じた。沈、姒、蓐、黃は、實に其祀を守つてゐたのを今晉汾の祀を主り、此等の國々を滅す、是によつて之を觀れば、則ち臺駘は汾神である。（左傳昭公一年）

第三は女媧傳說であつて「往古の時柱倒れ、九州裂け、天はあまねく覆はず、地はあまねく載せず、火は爐炎として滅せず、水は洋々として息まず、猛獸は善民を食ひ、鷙鳥は老弱を攫みさらふ、是に於て女媧氏五色の石を鍊りて以て蒼天を補ひ、大龜の足を斷つて以て四柱を立て、黑龍を殺して以て冀州を濟ひ、蘆の灰を積んで以て淫水を止めた蒼天補はれ、四柱は正しく、淫水は涸れ、冀州は平らぎ、狡蟲は死し、善民は生き、方州を背にし、圓天を抱き……此の時に當り、臥して倨々たり（靜かなる貌）興きて眄々たり、（平和なる貌）（列子五　淮南子三・五）「女媧雲の幕（幕枚）を張らんと筮す、之を占ふに曰く、『吉』、昭昭たり九州、日月代り極る、土地平均し、四國和合す、」（歸藏　太平御覽七八）全ては治まり、「女媧は黃土を搏めて人を作つた。（風俗通　太平御覽七八）

第四は共工傳說で地は人面蛇身朱髮有角なる共工氏によつて支配されてをり、初め人面にして獸身なる祝融が之を討つため遣はされたが、（山海經六）勝たず、次いで顓頊之と爭ひ、遂に之を敗り、共工逃げてその怒りのあまり、北西の天柱たる不周の山に觸れ、その角を以て打倒さんとし、

「天柱を折り、地維を絶つ、故に天は西北に傾き、日月星辰は、(東より西に)移り、地は東南に滿たず、故に百川水潦歸し、」(大洪水氾濫す)、(列子五 淮南子六)共工氏の子后龍顓頊と和し、よくその父よりゆづられた國土を治め、耕作に適せしめ、故に祀られて大社となり、后土と呼ばれた。(國語四)祝融の方はその命を盡さなかつた爲廢され、その弟吳回が侯家の祖となり、その子陸終六子を生み、三子は右脇より、他の三子は左脇より圻剖して出で、各諸姓の祖となつた。(世本、史記四十 國語十六)

第五は蚩尤傳說で大綱は前者と同樣である。

その主題は同一で地を支配する怪物が天から遣はされた英雄と戰ひ、遂に敗れると云ふ筋であるが、その名稱や巨細な點が全く違つてをる。怪物は蚩尤と云ふ名で「洋水より出で、八肱八趾疏首、九淖に登り、空桑を伐らんとする。(歸藏 初學記九)彼は黃帝を逐ひ、涿鹿の野に戰ひ、黃帝は熊羆豹虎その他の猛獸と共に久しく之と戰ひ、「流血百里(莊子廿九)に及ぶ。次いで黃帝之に羽のある「應龍」をして攻めしめた。應龍は水を畜めたが、蚩尤は風伯雨師に請ふて大風雨を縱つた。かくて地は大洪水となつたので「黃帝は乃ち天女の魃と云へるを下し、雨を止めしめた。應龍は蚩尤を逐ふて之を冀州の平原に殺したが、魃は天に復た上ることを得ず、また至る所雨降らざるを以て草木動物生息する能はず、爲めに田祖叔均之を黃帝に云ひ、赤水の北に置いた、此の水は此の世界を沙漠から分つてをるものである。(山海經十七)女魃は背二三尺、青衣を纏ひ、走行すること風の如く、目は頂上にあり、その行く所を辨ぜず、その處る所の北の地は水無き沙漠と化した。(神異經、山海經十七)斯くして黃帝は百穀草木を敷き、叔均は田祖となり、民に耕作を敎へ、黃帝の子孫は諸姓の祖となつたのである。(大戴禮、五帝德 史記一、國語十)

第六は混淆傳說で、禹の傳說とその他のものとが混淆して生じた各種の傳說が存する。その一は禹が共工氏を敗つて水を治むるに成功すると云ふ筋の傳說であり、(山海經十六)他は禹が「洪水を湮がん」が爲に相柳(山海經十七)又は相繇(山海經八)と云ふ怪物に打ち勝ち、之を殺さねばならなかつたとする筋であり、その怪物は共工氏の傳說群に屬してをるのである。今一つの傳說は禹を女媧氏と關係づけ、後者を前者の妃となつたと傳へるもの(帝王世紀 太平御覽一三二)である。

(三)

マスペロ氏は此等の傳說が古代シナの神話の中に如何なる意義を有し、如何なる位置を占めてゐたかといふ問題に入り、古代シナの神話は今日斷片的に殘存してをるのみであるが、由來シナ文化といふものは今日のシナ及び印度支

那の北部に居住した全住民に共通に存在した文化から生育發展を遂げたものに外ならず、南方に住する原住民の傳說とシナの古傳說とを比較することにより古代シナの信仰中に該傳說の占めた役割に若干の推察をなすことが可能であるとし、先づ北安南フキュの白タイ族の有する次の如き傳說を擧げてをる。

昔此の下界は水あり陸あり、天帝はイテゥ侯とその夫人に命じて下界に下り、その經營をなさしむる。然し二人が水田を開き稻を實らせると鳥と鼠とが來て食べてしまふ。鳥と鼠共は食べ終ると大きな榕樹に歸つてしまふ。此の樹を伐り倒さうとするがなかなか思ふ樣にはゆかぬ。そこで二人は遂に天に歸つて天帝に失敗を報告する。次に天帝はティン侯に地上に降り地を經營することを命ずる。之も亦同樣失敗する。三度目に天帝はプュ侯とナムといふものに地上に降りることを命ずる。プュ侯は天から銀斧と金斧とを借りて來てそれをもつて木を伐り倒し、水田を開き、開拓に成功する。プュはまた天に歸り、水牛其の他の家畜を請ひ受けて來て地を耕し、人が住める樣になし、彼自身は大木の形をなし國の守護神となるといふ筋である。このプュ侯の外に彼を助け、此の世界を開いた人物がをる。卽ちプュ侯が巨木を切り倒すと天はクアンロ族のフンヴィ侯といふ者を動物と共に之に授ける。プュ侯はクアンロに彼の伐採せざりし土地、疏通せざりし土地を委ね、子々孫々その地を開拓利用することを許す。此の侯がラクスアの守護神となり、クアンロ族の祖先となり、プュ侯の後なるロカム族の族長なき場合次位の貴族としてその代當者となる。

以上の傳說はタイのあらゆる住民に共通なものであり、ギアロの黑タイ族の間には之と同樣な傳說こそ見出だされないがロカム族の間に開闢傳說を略述する系圖が傳はり、族員が死ぬと之が口誦されてゐた。それによると昔君侯三代つゞき、四代目になると大水あり、天まで達した。三ケ月たつと水下り、六ケ月目にして水滴れた。天は下界にスオン侯とヌン侯といふ二人の人間を降下せしめる。彼等は十の銅瓠を持つて下界に下り、また十二の銅柱をもつて天を支へた。此の銅瓠よりは人間が生れ、此の二人の君侯よりはムアエ國の代々の領主が出たと傳へられてをる。

マスペロ氏は以上のタイの傳說は大綱に於てシナの傳說と相似てをるといふ解釋をとり、兩方の傳說をその附加的のこまかい點をとり、簡略にすると共に同じ主題の地方的に適應し變化したものに外ならぬとするのである。

その大綱といふのは次の通りである。

下界は水で蓋はれてをり、天帝が此處に天上の人間の

一人を遣はして經營をさせる。此者が下つて、然し障害にあひ、挫折する。天帝はそこで更に新しい人物を遣はし、之が大地の經營に成功し、その報ひとして土地の領主の祖先となる。卽ち天帝は更に地上に農業に必要なものをその同じ英雄により、又は外のものにより遣し、人間が地を耕すことをおぼえる。

卽ち天から英雄が降つて水の蓋ふ地を治め、耕地に變へるといふ傳說はシナ固有のものでなく、東南アジア文明に共通な基盤から發出したものである。卽ちシナの學者が歷史として解釋した諸傳說は實にかゝる神話傳說に外ならなかつたのである。然しかゝる傳說が眞實歷史時代に屢々見る如く先史時代に黃河が大洪水を起したといふ樣な事實の上に發生した傳說に後から接合して出來上つたものである。マスペロ氏はタイの傳說との比較によりまたその他禹の傳說以外のシナ諸傳說にそれ自身が明かに黃河やその他の河川の洪水を少しもその傳承の本質としてゐない、表面的にさう見える場合があつてもそれはシナ人の住地の地理的狀態に單純に適應したからであるとする。卽ち氏はシナの洪水傳說が地方的の洪水傳說より發生したといふ說を排し、かゝる影響があつてもそれは第二義的のものと解するのである。

氏の意見によると、此種の比較は此の傳說群が神話中に占める位置の如何なるものであるかを明瞭ならしめる。タイ族に於ける此種傳說の位置は明かである。卽ちこれはこの世界の始まり、地上に人間の到來したことを語るものである。此種族に於ては嚴密な意味で天地の創造神話といふべきものは存しない。世界は常住存してをり、大地は始めから人の住む所であつたわけではない。世界は三重であり、上が天で中が地で下に侏儒の世界がある。當初に於て天は人の住む所であつたが地は水で蓋はれてをり、天帝その子を遣はして之を治めしめ、その報酬としてその領主となり、土地神とならしめる。其時以來人が此地に住み、之を耕す樣になつたのである。

共工氏傳說に於て其の子「后土」が大地の神となるのも人間が未だ上帝により地上に遣され、居住しない前に彼が大地の古い支配者を代表してをるからである。此處にも人間の起原傳說が主題となつてをる。禹の傳說に於ても之が最も歷史的に改造されたものであるといひ條、上述の性質は孟子の次の句中に表白されてをる。「天下の生は久し、一治一亂す、堯之時に當つて水逆行して中國に氾濫す。蛇龍之に居り、民定まる所無し、下なる者巢を爲り、上なる者營窟を爲る。書に曰く、洚水予を警むと、洚水とは洪水なり、禹をして之を治めしむ、禹地を堀りて之を海に注ぎ、蛇龍を驅りて之を菹に放つ、水地中より行く、江淮河漢こ

れなり、險阻既に遠かり、鳥獸の人を害する者消す、然して後人平土を得て之に居る。」（滕文公章句下）今一つは次の句である。「堯の時に當り天下猶平ならず、洪水横流し、天下に氾濫す、草木暢茂し、禽獸繁殖す、五穀登（みのら）ず、禽獸人に偪る、獸蹄鳥迹之道、中國に交はる。堯獨之を憂へ、舜を擧げて敷き治めしむ。舜益をして火を掌らしむ。益山澤を烈（もや）して之を焚き、禽獸逃れ匿る、禹九河を疏し云々。」（滕文公章句上）

兩方の文獻を通じ、孟子が禹の治水を以て世の開闢と心得てをること、人間の起原は此時に初まり、それ以前に遡らぬことは明白である。從つて如何なる異傳と云へ、洪水傳說は古代シナ人にとり今日北東京（トンキン）の白タイ黑タイ族に於けると同樣の役割を演じてをつたこと、從つてその古代神話中に占むる位置は明確に定まり、その形式の如何を問はず、全部、眞實の歷史並びに地中海世界の洪水傳說と無關係で、人間と文明との起原を說き、地が水で最初蓋はれてゐたと說く開闢傳說の一形態に外ならぬ。

シナが今日の如く統一してをれば此の古い開闢傳說が一つの形式か、または多少の異傳を伴ふた形で傳へられたに相違ない。然し歷史の初まる當初シナは幾つかの大地區に區劃され、その間に交通の困難が殆ど越え難きものあり、また廣大な蠻人の住地が介在してゐた。かゝる地區それ自身も多くの采邑に分たれてをり、各中心はそれぞれ共通の本質を變え、それぞれの還境に適應した特殊の傳說を形成した。かくして吾人に傳へられてきた諸傳說が生れたのである。上述した六種の傳說形態にその發祥の地域を判ずることは難くない。

第一の禹傳說は龍門の隘がうがたれ、黃河が汾水の落口の上流で奔溢したと云ふ地方傳說が本で「龍門未だ闢かれず、呂梁未だ鑿たれず、河は孟門の上に出で、大溢逆流し、丘陵高阜の之を滅するあるなし、名づけて洪水といふ。大禹疏通し、之を孟門と謂ふ」（水經注四）云々の形が之を保存してをる。禹と鯀とを祖先とする姒姓の國々に二派あり、その西方なる莘、董、辛、夏の小國は山西と陝西なる龍門と華山との中間、黃河の邊りにあり、龍門なる禹の祠を祭祀の中心とし、一方東方なる鄫、費、杞の小國は山東、江蘇、河南の緣邊に位ひし、羽山なる鯀の社を中心としてゐたらしい。此の二種の傳承が古く混淆し、羽山の淵の有名な神が黃河の渦をまつる地方的小神にとつて代り、それにより、より重要な禹といふ英雄に附會されることが出來たのである。

第二の臺駘傳說は、汾水と現在の涑水、昔の洮水との會合點を遠からぬ點に祠を有し、曲沃の小盆地から起原を發した信仰に基くらしく、その近傍にその祀を守る小國が散在したらしい。然し此の信仰は漸次開拓と共に北方に擴り、

山西で最も重要な太原の盆地に移動した。此の傳說は禹傳說の地方的代用であつたことは明瞭である。

第三の女媧傳說は東部シナに發祥地が比定される。黃河の下流の九支が九河と呼ばれ、女媧の開鑿したところとされてをる。また彼は伏羲の妹とされ、その伏羲から出た風姓の諸國が濟水の傍に點在してをるのである。卽ち女媧傳說の起つたのは南は江蘇と境し、西は黃河、北は泰山に區切られ、濟水に沿ひ、中央がほゞ濟寧府に當る比較的狹少な地域である。

第四の共工傳說の行はれた地點は、祝融から出た八姓が山東、江蘇、安徽、河南、河北の境內、黃河と海との間に擴つてをり、此等の姓に屬する諸侯は泰山と大行山の南方に封邑を持つてをるので、大體此の地域、東部大平原の南部に分布地帶を跡づけることが出來る。

第五の蚩尤傳說は、蚩尤の墓と稱するものが山東の西部にあり、またその傳說が沙漠の成因を說くので大體これは古代黃河の下流、濟水と沙漠との間、卽ち東部大平原の北東部に成立したことが推察される。そして此の傳說は後に山西太原の附近に移植された。

斯くマスペロ氏はシナの洪水傳說を復原し、これを地中海文化圈に發達した「ノアの洪水」型傳說と交涉なく、またシナに實際起つた地方的洪水傳說とも本質に於て關係なく、東南アジアの原住民に共通に存在した原初的水洋の開闢傳說がその母胎をなしてをると結論するのである。かくの如き創世神話を周代に史家が史的物語に變形し、今日書經に見ゆる樣な形に造り變へたので、例へばその中の怪物的な神人共工氏は單に洪水を惹起した拙劣な一官吏と書き換へられてをる云々。

(四)

かういふマスペロ氏の考へが正當であるかどうかを批判する爲に今少し材料それ自身の分析を試る必要がある。氏はシナの洪水傳說は悉くある單一な創世神話がシナの各地域に適應して變形したものと解釋するのであるが、氏の擧げた六種の洪水傳說なるものはいろいろ系統を異にした說話が殊更に纏められてをる觀がある。先づ第一は地形を說明する爲案出された傳說群であり、禹傳說の原始型の如きは盆地と隘口とを說明する此種の地形說明型洪水傳說であつたかと思はれる。後出のものであるが華陽國志蜀志に見ゆる「望帝の時水災あり、其相開明玉壘山を決して以て水害を除く、帝遂に委するに政治を以てし、堯舜禪授の義に法り、遂に位を開明に禪位し、帝西山に昇つて隱る」も此種の盆地說明型洪水傳說であらう。また共工氏傳說に於ける其頭不周山に觸れ、天柱墜れ、地が傾き、以來河が東流

するようになつたといふ說話も、また蚩尤傳說に於ける女魃が天に歸られず、沙漠を發生させたと說く說話も一部地形說明型傳說の型を備へてをる。禹が相柳を退治した傳說も黃河の下流が奔溢橫流する狀を象徵したものとして同型の說話とみられよう。此の形式の傳說の一異體として陷沒型洪水傳說が擧げられる。此の話は池湖の生因を說明し、また水中に見ゆる沈木を說明したりする點に於て矢張り地形說明型洪水傳說の一種とみるべきであり、シナに於ては伊尹傳說が之に該當する。(十二)

卽ち呂氏春秋本味篇に依ると、「有侁氏の女子桑を採つて嬰兒を空桑の中に得、之を其君に獻ず、其君烰(庖)人をして之を養はしむ。其然る所以を察するに、其母伊水の上に居り、孕む、夢に神あり、之に告げて曰く、臼水出せば東走して顧る勿れ、明日臼水を出だすを見、其隣に告げ、東走すること十里、而して其邑を顧る、邑盡く水となる、身因つて化して空桑となる、故に之を命じて伊尹と云ふ、これ伊尹の空桑に生るる故なり云々。」

今一つの洪水傳說の型は、神人又は動物爭鬪の結果大水があるといふ形式で共工傳說や蚩尤傳說は此の系統に屬し、自分は之を爭鬪型洪水傳說と名づけたい。多くの場合之は次のうつぼ舟漂蕩型洪水傳說と結合してをる。ヴァンゲネップはその「傳說の形成」(四)(パリ、一九一〇、八四頁)に於て洪水傳說が各地の地方的洪水傳說に起原を發し、それがキリスト教宣教師の影響で舊約聖書の洪水物語と交涉をもつようになつた、然しその中にもとから相互脈絡の認められ得るものありとし、メソポタミア流域に起つた傳說が一方パレスチナに、他方ペルシアに傳播し、其處から扇狀にアラビア、南方キリスト教徒、スラブ、ウラル・アルタイ族に擴つたと斷じ、セム族起原の所傳は一神教的であるが、ペルシア起原の所傳は、神と惡魔との對立する二元教的であると云つてをる。シナの爭鬪型洪水傳說が斯樣な西方の二元教的神話の影響を受けてをるかどうかの研究は之を將來に保留すべきで今此處には論じない。シナ近傍に於て此種の洪水神話を求めると南方山地の原住民、及び南洋の住民の間に類例が發見される。

うつぼ舟漂蕩型洪水傳說の方は大水で人類は絕滅するが、或る特定の人が中空ろの植物や容器の中に入つて水に浮び危難を免れ、次代の人類の祖先となると云ふ形式でノアの洪水の傳說は之に含まれる。東南アジアの原住民の間には早くより此の種の洪水傳說が分布してをり、殊に彼等の間に瓠の樣な植物の實の中に入つて水上を漂流するとか、また瓠の中から人類が生れ出ると云ふ形式が通則となつてをる。マスペロ氏の云ふ樣にシナの六種の傳說が悉く最初天より降つた者が排水して地をひらくと云ふ原初水洋型創

世傳說が地方的に分派しその土地土地に適應して發生した異傳であると簡單に見るべきであらうか疑はしい。一體洪水といふ意味は或時期に水が增して溢れ、損害を與ふることを意味するのであり、最初より水に蓋はれてゐたと云ふ宇宙生成神話と一つものであるかどうかは簡單に定らない。例へば氏の引用する黑タイの神話も明かに君主の四代目に大水が起るのであり、且つ天から降つてきた君の齎らす瓠の中から人類が生れ出る形式になつてをるので、之は東南アジアに普通なうつぼ舟漂蕩型洪水傳說と型を同じくしてをる。原初水洋型傳說がタイの間に行はれてゐたことは事實であるが、之がどの程度までシナの洪水傳說と交涉を持つかは、なほ疑問であり、殊にマスペロ氏の如くシナの洪水傳說が悉くこの種のタイの神話との比較に依つてのみ解釋され得るものと見るべきかは可成り疑はしい。洪水傳說と云ひ條いろいろ複雜な種類別があり、その發生には各々歷史があり、之を一概に論じ去ることは難しい。

フレーザーは世界に於ける洪水傳說を集め洪水傳說が傳播か並行發生かといふ問題を論じてをるが、その傳播系路の考察は餘りに簡單で文化圈的考察を缺いてをる如く思はれる、例へば南シナに於けるうつぼ舟漂蕩型傳說中よりロロの傳說を取上げ、之にネストリウス派か何かのキリスト宣敎師に依つて傳へられた舊約聖書物語の影響ありとし、結局メソポタミアの洪水傳說が此地に移植せられたものと見てをる。然したとひ此の種の附會變形があつたとしても、大體メソポタミヤの洪水傳說と同一系統のうつぼ舟漂蕩型洪水傳說が此の地方に古くから存在したことは明かである。既にディクソン氏はその「世界民族の神話——大洋洲篇」(ボストン一九一六)中にマライ族渡來以前の純粹インドネシア種族の神話は人類の起原及び宇宙創成神話を缺き、一面極めて洪水神話の發達せる特色あり、此點原始モン・クメル種族の神話と相關聯せるものなることを主張してをる。今同氏の意見を此處に紹介してみよう。

インドネシアの全住民の中比島の北呂宋の山地住民は現在吾々の手にする材料だけでは宇宙創成の神話を全然か或は殆ど全く缺いてをる。彼等の信仰によると世界は恐らく現在の形式でないまでも既に存在し、また上部の空の世界も存してをる。大地や又人類や動物や植物の創造に就ては殆ど僅か述べるか、又は全然言及してゐない。此等の部族は全て洪水傳說を持ち、それ以前の時代に就て述べる所があつても僅少である。かゝる部族の間に創世傳說の外見皆無なことは極めて示唆的である。と云ふのは彼等はインドネシアの最初期の非ネグリトー層の純粹な殘存の一つを構成し、實際にインド及びイスラム文化により影響されてゐない種族であるからである。インドネシアの最初期の非ネ

グリトー族と東南アジアのモン・クメル族との間に最近言語學的親緣關係が提言されてをるから、此の創世神話の缺失、及び洪水傳說の重要性と云ふ二點が現在手にしうる極めて僅少な材料により判ずる限りモン・クメル族の間にも見出だされる事は兩者の親緣上極めて注意すべき事柄である。（前引書一五五頁）斯くディクソン氏は創世神話と洪水神話とを別け、後者は全く前者の要素を缺いてをる樣に論じてをるが、洪水神話と云へ、或場合には創世神話の性質を兼ねそなへてをり、その洪水は或場合原初的水洋に該當してゐるのではないかと思はれる節がある。そしてその上に漂蕩してをる空穗舟は東南アジアでは瓠その他の植物の形をとつてをるが、かゝる丸い形の容れ物は彼等の原始的な思想で宇宙の象徵ではなからうか。禮記の郊特牲では陶匏を用ふるは以て天地の性に象るなりと言ひ、アッサムのガロの宇宙創成神話では、宇宙は最初一面荒涼たる荒野であり、生けるものなく光なく生活が人間に不可能であり、世界の上に非常に巨大な黑い壺が垂れ下つてをる。ポヌパと云ふ精が杵をもつて此の壺を上方に押し上げ、之に依つて太陽が輝くことが可能となると云つてをる。之に依ると天は壺によつて象徵されてをるのである。今東南アジアに於ける洪水傳說をみると、之が一方創世神話を意味する場合あることを否定出來ない。例へばマライ半島の原始民ベタア・ジャクンは次の如き傳說を有してをる。大地は初め水の深い淵の上に皮が蓋ふてをるばかりである、ピルマンと云ふ神がその皮を破いたので、大洪水が起つた。ピルマンは男と女とを創造し、之をプライと云ふ木の箱舟の中に入れる。箱舟は水と共に漂蕩し、男女はやがて水が引いてから地上に脫出する。まだその時は太陽がつくられず四邊は暗黑であつた。その女の右の足の腓から男が出、左足の腓から女が生れ、これから人類が初まつたと云ふ。（フレーザー前引書二一一頁）またアッサムのアホム族の間にも同じ型の洪水傳說あり、大水から助かつたリプロンと云ふ賢人はやがて地を燒き盡す大火に遇ひ、牛の胃腑の中に潛つて助かる。その中に瓠の種子を見つけ、災後之を地上に蒔いて澤山の大きな實を收穫する。暴風雨の神は地にサオパンと云ふ大空の神を遣し、大地をならさせる。地が居住に適する樣になると暴風雨の神はまた雷神を遣し、瓠の實を相繼いで割り、中から陸續人類、河水、獸、鳥、有用植物等が出、地はもとの如く生物で充滿する。（フレーザー前引書一九九―二〇三頁）かういふ洪水傳說はやはり創世傳說の一種と認むべきではなからうか。東南アジアの洪水傳說で瓠の中に兄妹が洪水を脫するのは原初的海洋の上を漂ふ原始根元の表徵から人祖の發出する創世神話の影響が窺はれる。モン・クメル及び純インドネシア族の間に創世神話を缺き洪水傳說のみ見受けるのは後者が創

世神話をかね含んでをるからであらう。

またディクソン氏はマライ系創世神話の源由につき次の如く論じてをる。インドネシア神話の全體系から印度又はイスラムの接觸によると思はれるものを全て除いてもなほ固有のものと思はれるものが殘存する。此の固有のものと西方との關係は疑問である。東南アジアの固有民、印度又はシナ文化に影響されぬ住民の智識はごく乏しい。そしてその神話に對する材料は殆ど缺けてをる。もし吾人がモン・クメル種族に嚴密な純インドネシア人の神話との相似を求めるならば、後からインドネシアに移住したマライ族の神話の先行者をタイ又はシャンの間に求めるべきであらう。此の種族は此の地域に於て歴史の初まる時代南シナと北インドシナの非常に廣い部分を占領してゐた。北方なるシナ人の徐々たる擴大により南と東とに追はれ、紀元前一千年紀から大陸の東南端に追ひこめられ、今度は彼等があべこべにインドシナ半島の大半を明かに占領してゐたモン・クメル族に壓迫を加へた。一方シナ化した安南人、他方シャム人とタイ起原の種族に取卷かれ、古いカンボジアのモン・クメル勢力は遂に滅亡した。然し此の征服者タイ族の近代の代表者は餘りに外部の影響を蒙り、彼等の中にインドネシアのマライ族の固有型を探し求めることは出來ないが、寧ろラオス、シャンステーツ、雲南、南シナの他の省に居住するより未開のタイ種族にかゝる固有型を求むべきであらう云々。（前引書二四三—二四四頁）

確かに以上の意見は達見であり、インドネシアに於ける創世神話の或形式、天より人祖が下つて來て地を開くといふ樣な型とマスペロ氏の擧げた白タイ等に於ける同じ型の創世神話との間には關聯が打建てられるかも知れぬ。もしマスペロ氏のシナ洪水傳說の源由を求めたタイ系の創世神話がインドネシアに於けるマライ系創世神話と關聯ありとすれば、南シナ及びインドシナに於けるうつぼ舟漂流型洪水傳說、即ち本質的にモン・クメル系の創世神話を代表すると見做される型は一方インドネシアに於ける古い神話層を構成すると共に他方東南アジア大陸に於ける前時代的文化を代表する舊神話層の片鱗を示すものではあるまいか。今は南洋に分布する洪水傳說はインドシナ半島を經て海上に擴つたものであることは明瞭であり、從つてインドネシア族がモン・クメル族と手を分つごく悠久の昔からかゝる傳說が東南アジア大陸に存してゐたことを推察することが出來る。

（五）

同樣にアメリカ大陸にも洪水傳說が廣く分布してをり、之もまたもとアジア大陸から起原を發する樣に思はれる。

此處にメキシコと南シナ原住民の神話の相似を示す一例を擧げて見よう。

西部メキシコのサンタ・カンタリナ附近の山地に住むフィチョル印度人は次の如き洪水傳說を傳へてをる。

昔一人の土人が畑を作らうとして木を伐つてゐた。然し毎朝切り倒した木が元通りになつてをる發見して殘念がる。五日目に彼はその原因を知らうと決心して隱れて窺つてをる。すると開墾地の中央の地點から手に杖を持つた老婆が現れ、その杖で南、北、西、東、上、下を指ずと見る見る彼の倒した木は忽ち元通りになつてしまふ。大變怒つた彼は考婆に何故自分の仕事を絕えず無効にするかと詰問する。此の考婆は全ての靑いものを地下界から芽を出さしめる大地の女神に外ならぬ。彼女は五日を出ずして大洪水が到來するから開墾は無駄である。無花果の大きな箱を作り、中に各種の色をした玉蜀黍五粒と豆五粒、火種と、之を絕やさぬ樣にする南瓜の莖、及び黑い牝犬をつれて入れと敎へてくれる。果して五日目に大洪水が起り、箱は地上に漂蕩する。老婆は箱の上に坐り、五年の間水上をただよひ、第一年は南方に、第二年は北方に、第三年は西方に、第四年は東方に、第五年は上方に流れ、全世界は水に浸されてしまふ。第六年目に水が引き、箱はサンタカンタリナの附近の山の上に定着した。金剛鸚鵡（マカウ）とその他の鸚鵡達は山を啄み、今日の如き谷を作り、水は之によつて流れ、海になつた。地は乾き、老婆は風と[illegible]て去つてしまふ。男は再び開拓を初めるが、牝犬と共に穴の中に住み、朝に出て夕に歸る。夕方歸ると夕食のパンが用意されてある。五日目に誰が之を作るか窺ふ爲に隱れてをる。すると牝犬がその皮を剝いで女の姿となり、粉をつくつてパンを作らうとしてゐるのを見つける。こつそり傍に忍び寄つた男はその皮をとつて火中に燻べてしまふ。女は之を怒つて犬の樣に吠え走るが、男は粉を水で和し、それで女の頭を洗つてやる。すると女は蘇生した樣に感じ、その爲永久に女となつてしまふ。二人は大きな家族の祖先となり、世界は再び人の住む樣になる。（フレーザー「舊約聖書中の民俗」一卷二七七—二七九頁）

此の傳說と似てをるのは貴州省西南部苗族の間に採集された左の話である。

或時二人の兄弟が田を鋤いてをると次の日にはまた元通りならされてしまふ。あまり毎日續くので五日目に兄弟が隱れて誰がさうするかと窺ふ。すると夜半に一老婆が天から降りて來て木の板で田を元通りにならしてしまふのを發見する。そこで兄が先づ飛び出して老婆を捕へ、之を殺さうとする、弟は之を止めて老婆に一體何故かゝる防害をするかと詰問する。すると彼女はやがて洪水が來り、耕作が無駄に歸するからだと云ふ。老婆は自分を助

けた弟には大きい木鼓を造り、之に依つて洪水を避け、殺さうとした兄には鐵鼓を造ることを勸める。弟は枝のある大きな樹を伐り、幹の中を空ろにし、その上に皮を張る。愈々洪水が來ると弟は妹と共に中に這入る。そして木鼓は水面を漂ふたが兄の鐵鼓は水に浮かばず、兄は溺死してしまふ。弟妹の入つた枝の張つた樹が水上に漂蕩するのを天の神が見て、之を自分は十二の角しかないのにそれより角の多い動物がをると云つて畏怖し、龍や蜥蜴その他の動物を呼び、河道を穿つて水を流し、洪水をひかさせる。木鼓は水のひいた際峻しい崖の上にひつかかつて中に入つた弟妹は途方にくれたが、弟妹は奇計をもうけ鷲の雛の羽を髪の毛で作つた繩で結んで飛べぬ樣にする。母鷲が困つて兄妹に賴み、雛を飛べる樣にする代り木鼓を地上におろすことを承諾する。かくて首尾よく地上と降りることの出來た兄妹は相婚して人祖となると云ふ筋である。（クラーク、「南西シナ部族間に於て」ロンドン、一九一一、四四頁）

此の傳說とメキシコの傳說と比較すると細目は異なるけれども洪水の到來を知る徑路が何れも開墾を無駄にする老婆を捕へ、その口から聞く點に於て似てをる。また着岸後鳥の援助を待つ點などが歸を一にしてをる。恐らくこの兩方の洪水傳說はもと共通の本源から出た主題（モチフ）をその話の中に取入れてをるのであり、アジアよりアメリカに移住した印度人の祖先はその未だアジアの內奧に住んでゐた時代此の神話の主題をその共通な源から汲み取つたものであらう。してみると苗族の洪水傳說も極めて古い本源から出たものであり、殊に牝犬と婚するメキシコ傳說は苗族と近緣な猺族の間に分布する犬祖先の話とも聯絡ある點に於て極めて興味が存するのである。たゞ猺の槃瓠傳說に於ては犬が男性であり、メキシコ傳說と性が異なるが海南島黎族の間に行はれる傳說に公主が夫なる犬と共に屋根のある小舟に入れられ海上を漂蕩し、島に流れ着く。父なる犬が息子に誤つて殺されてから母子相婚して種族の祖となる話はうつぼ舟漂流型洪水傳說の變形と見てよろしく、且つ此型の話がシナに古くから行はれてゐたことは山海經卷十二の郭注に「昔盤瓠戎王を殺す、王高辛美女を以て之を妻はす、以て訓ふべからず、乃ち之を會稽東南海中に浮べ、三百里の地を得て之を封ず、男を生めば狗たり、女は美人たり、是を狗封の民と爲すなり」とあるのによつて察せられる。なほ此の點に就ては別に改めて論じたいと思ふ。

（六）

苗猺族の間に存する洪水傳說には前述した如く爭鬪型とうつぼ舟型とが一つになつた形式が行はれてをる。今その例を擧げると、マン・コク族の傳說は次の如くである。

世界は種々な神人によつて創造せられる。その中ピエンフンが人間を作つた。チャンロコといふ神が芭蕉の葉で大きな家を作るとルンクン（雷公）といふ今一人の神が此の家を倒してみせると豪語し、果して之を覆し、自ら鷄に變形する。チャンロコ之を捕へ、鐘の形をした籠の中に入れ、水を與へずに禁錮する。渇に苦しんだルンクン之に小許の水の代償として己れの齒を與へ、然し水を呑むや以前の姿に立戻り、籠を破つて天に上つた。チャンロコはその齒を蒔くと芽が生じ、大きい葫蘆がなる。フハイと云ふ賢人がその妹のフハイムイと共に天の鳥の報せにより葫蘆の中に隱れ、一方チャンロコはその家の殘骸の上に立ち水を漲して天に達せしめ、その敵ルンクンを殺さうとする。水は上昇して全ての人類を絶滅させ、チャンロコは天門の近くに迫つたが、その時ルンクンが水を支へる堰口を切つたので水は海に流れ込み、チャンロコは地に墮ち頭を崑崙山にぶつけて死んだ。フハイとその妹を乘せた葫蘆は崑崙山の上に流れつき、兄妹相婚して人祖となる云々。(七)（ルネ・ド・ラジョンキエール「北東京民族誌」、巴里一九二四、二三三、二三四頁）

また貴州省の黑苗の間に於ける洪水傳說は次の如き形式である。

アフオ（雷）とアジーと云ふ兄妹が財產の分け方を爭つて不和となり、天に居るアフオが洪水を起してアジーの住む陸地を滅さんとする。アジーは大きな葫蘆の中に身を隱し、また百千の種子をとり小さい葫蘆の中に入れる。やがて地龍が全部の水を呑み干し、山龍が全部の霧を呑み去り、洪水が退去し、陸地がまた現れたが、世上の人悉く死んでたゞアジーとその妹しか生き殘らぬ。そこで二人が相婚して人類の祖となる。（クラーク、前引書四三—四六頁、芮逸夫、苗族的洪水故事與伏羲女媧的傳說、人類學集刊、一卷一期）

此の爭鬪型は印度支那山地に住むバナル族の間にも行はれてをる。

昔或時蟹と鳶とが爭ひ、鳶が强く蟹の甲羅を啄んだので、その表面に今日の如き穴があいた。この復讐に蟹は河海の水を漲らせて天に達せしめ、全ての生ける者は絶滅し、たゞ兄妹二人のみ大きな箱の中に入り、大水の上を漂蕩して生殘つた云々。（フレーザー前引書、二〇九頁）

またインドネシアのニアスの土民は次の如き洪水傳說を傳へてをる。

昔山々の中にどれが一番高いか爭ひがあつた。大祖先のバルグルオメウォナが此の爭ひに困り果て、その金の櫛をとり河中に投ずると、それが大きい蟹となり、海の水の流れ去る水門をせきとめたので忽ち海水が增溢し、地上の生物は高い山に逃げた者を除いては死滅してしま

つた云々。（フレーザー前引書、二一九頁）

臺灣のブヌン族の神話に於ては、蛇が川をせきとめ、洪水を起すのを蟹が蛇を殺して洪水を止める話がある。（前引書二三二頁）シナに於ても海中に大蟹が棲んでをると云ふ信仰は、山海經十二に「大蟹海中に在り」とあり、注に「蓋千里の蟹也」とある。海の潮の干滿を說明し、シナ人は海中の大魚が穴に出入し、それにより水が進退し潮汐をなすと考へてゐた。（倭名鈔卷一引周處風土記）

シナの洪水傳說がかういふ爭鬪型のものを含んでをることは明瞭であるが、さてうつぼ舟漂蕩型の傳說とはどういふ交涉を持つてゐるであらうか。自分の考へでは伊尹の空桑傳說はかういふシナの前時代的な古代神話の痕跡を止めるものとして研究に價すると思ふ。伊尹は洪水に際し母の化した空ろの桑の木から生れるのであり、空桑とは中空ろの桑の木で槽や臼や船の原始型とも關係あるものである。また此の傳說に於ては洪水の起る豫兆として、臼が水を出したら逃げよといふ句が使用されてをる。これは臼と洪水とが聯想される前の古い傳承の記憶が此の洪水傳說中に甦つたものと見るべきではなからうか。云ふまでもなく大水で兄妹が逃げる空穗舟が臺灣の高砂族の間に於ては臼の中で逃れる話になつてをるのであり、苗族に於ては木の空ろに皮を張つた太鼓で逃げる型となつてをる。そして高砂族洪水神話の一例では臼を搗き初めるとその音と共に洪水が起る說話（生蕃傳說集十一頁）あり、ボルネオの洪水傳說でも大蛇の皮を張つた太鼓が鳴り出し、それと共に大洪水が起る一例がある。（ディクソン前引書、一八一頁）伊尹の空桑傳說は古くシナに存した此の種のうつぼ舟型洪水傳說と一脈の關聯を語るものではなからうか。

シナ學者の中には伏羲女媧傳說を苗族の間に存する伏羲兄妹洪水漂流譚より出たと說く人があるが、たまたま伏羲といふ名が苗族神話の中に用ひられてをるとしても寧ろ苗人の方がシナ古傳說の影響を受けて採用したと認むべきであらう。然しながら伏羲と女媧が兄妹であると云ふ傳へが古くあり、一方に於て武梁祠の彫刻にある如く二人の半身が蛇體で下身が相交つてをる所を見ると兩人は夫婦であつたと思はれ、且つ女媧が洪水後の天地を修理するに鼇の足を斷つて四柱にたてる話も大龜が宇宙を擔ふ世界流布神話と關係あり、また黃土と繩から人間を創造する話もあり、（芮逸夫苗族的洪水故事與伏羲女媧的傳說、人類學集刊、一卷一期）結局此等の說話にはマスペロの引いたタイの創世神話とは遙かに性質の異つた別種の創世神話との交流を認むべきであらう。

結局自分は一先豫備的の結論として次の如き說を提示したいと思ふ。シナの洪水傳說は多元であり、地方的の洪水の記憶もあり、また地形說明の要素もあるが、その外に創

世神話の影響が認められる。その神話の中にマスペロ氏の云ふ如くタイの樣に天より人祖の來由を說く創世神話要素を摘出なし得るが、此の外に東南アジアに共通な鬪爭型、うつぼ舟漂蕩型洪水傳說の分子あり、之も一種の創世神話を兼ね具へたものと見るべきであらう。一體シナ民族の形成にタイ文化の役割を重視する人があるが、自分は神話の點から云つてもそれより以前南シナに重要な發展を遂げてゐた他の文化要素の役割を無視し得ないと思ふ。この文化は今日南シナ及びインドシナの山地に殘れる未開な住民、モン・クメル、苗族、チベット・ビルマ系民族によつて代表されるものであり、そして此の事は同時にシナ民族の形成を論ずる場合忘れてならぬ點であると思ふ。

（七）

中國神話に於ける洪水傳說がタイ系の開闢傳說とのみ比較さるべきでなく、廣く他の種類の洪水傳說とも比較さるべきであると云ふ予の所說が幸ひにして容れられゝば次に論じて見たいのは此種の洪水傳說の成立過程に於ける祭儀との交涉である。伊尹の空桑より生れたと云ふ傳說は洪水傳說の一異態である陷沒說話と關係あると共に臼とか空桑とか云ふ觀念にうつぼ舟漂蕩型洪水傳說とも遙かなつながりを持つてゐるとは旣に述べた所であるが、此の「空桑」と云ふ名稱は、「舜之時共工洪水を振滔して以て空桑に薄（せま）る」（淮南子本經訓）とある樣に共工傳說に於ても洪水と聯關して出てくる。註に空桑は魯の地名をなしてをるが此の場合之を地上の地名とするよりも、太陽が毎日天に登る時、利用すると云ふ扶桑の大木を指し、洪水が天に迫る狀を形容したと見るべきではなからうか。「帝顓頊若水より生れ、實に空桑に處る。乃ち登つて帝と爲る」（呂氏春秋五古樂篇）とある如く、空桑は登つて帝と爲るに相應しい高處であり、若水が若木と聯想される樣に空桑と扶桑も同一視されたのではないかと考へられる。グラネー氏はその「古代シナの舞踊と傳說」卷二の中に此の空桑をもつて桑で作つた中空ろの槽型原始樂器であり、太陽の朝の昇天、水浴、水火の爭ひを祝福するためたゝき鳴らしたものであらうと論じてをるが、（P.435—441. 拙著「日本神話の研究」二三一頁）此の種の形態の樂器は啻に太陽の祭儀に用ひられたのみならず原始社會に於てあらゆる祭儀に重要な役割を演じたものなるべく、南方シナに住む原住民の例を取れば、それが新年の祭に中心的な職能を滿たしてゐたことがわかる。卽ち清の李宗昉の黔記によると「白狆家荔波縣にあり、毎孟春平壩を擇み、大木一を竪てゝ其中を空にし、名づけて巴槽と曰ふ。男子各竹片を執り、巴槽を擊つとあり、明、鄺露の赤雅には猺族の季節祭を記し、「時節槃瓠を祀る……其樂五合、其旗五方、其衣五彩、

是を五參と謂ふ、樂を奏する則ち男は左、女は右、鐃鼓、胡廬笙、忽雷、響瓠、雲陽、祭畢れば樂に合せ男女跳躍、雲陽を擊つて節と爲し、以て婚媾を定む、側大木槽も具へ、槽を扣いて羣號す……」とある。また口、族も陰曆一月の初めに祭をなし、大木を穿つて槽を造り、男女が竹片をもつて一齊に上部を扣く、その音太鼓の如く、男女は腰を抱き、最後に相戲ると云ふ。(グラネー前引書、二八八頁 Colquoum, Across Chryse, II, 238)

湖南の苗人は十月農事終ると牛の犧牲を捧げ、次に長木を刳つて其中を空にし、皮を其端に冒ひ、以て鼓となし、婦女の美なるものをして跳つて之を擊たしめ、男女の善く謌ふ者を擇み、男を左に女を右とし旋繞して歌ひ、迭ひに相唱和し、之を跳鼓藏と云ふとある。(中華全國風俗誌上六、三九)また古く後漢書註に引かれた干寶の晉紀にも槃瓠種が「魚肉を揉雜し槽を叩いて號し、以て槃瓠を祭る」と云ひ、即ち此の大木を穿つて造つた槽は、同時に魚肉酒飯を雜揉するものであり、(歲首槃瓠を祭り、魚肉酒飯を木槽に雜揉し、羣號禮をなす、「宋、范成大桂海虞衡志」)彼等はその木槽を中心に犬祖先の形態を模倣したのである。(狗王惟狗猺之を祀る。正朔に値ふ毎に、家人狗を負ふて爐灶を環り行くこと三匝、然る後舉家男女狗に向つて膜拜す、是日餐に就く、必ず槽を扣き、地に蹲つて食し、以て禮を盡すと爲す、(「劉錫蕃、嶺表紀蠻」八一頁)

槽と並んで今一つの重要な役目を彼等の季節祭に演じてをる樂器の一に瓠が數へられる。笙(十二)はもと瓠をもつて作り、之に竹管をつけ、その管の端に簧(シタ)を附けて、之を吹いて聲を發したと云はれるが、この原始形は、南方原住民の間に永く殘り、赤雅の中に猺人の用ふる樂器の中に胡廬笙が數へられ、宋朱輔の溪蠻叢笑にも「潘安仁笙賦、曲沃懸瓠、汝陽匏篠、皆笙之材、蠻吹く所葫蘆笙また匏瓠の餘意」とある。

南方の原住民が季節祭殊に春の祭に於て柱をたてその周圍を躍り廻り配を擇ぶことに就ては既に述べしことあり、例へば貴州省の原住民「龍家」の一種狗耳にあつては、「春時木を野に立て、之を鬼竿と謂ひ、男女旋躍して配を擇ぶ、既に奔れば則ち女氏の黨牛馬を以て之を贖ふ。」(貴州通志、卷七)とあり、自分は之を我神話に於けるイザナギ、イザナミ二神の天の御柱をまはつて婚儀される風に比較し、斯くの如き立竿、旋躍の風に類似した祭儀が存して我神話の天柱の構想が生れたのであらうと推したことがある。(拙著「日本神話の研究」二〇六頁)之と同樣な例は東京のマン(猺)の間の洪水神話にもあり、瓠によつて漂蕩し、大洪水から逃れた伏羲兄妹が、愈々相婚して人類の祖とならんとした時、紫微山の松と梅の杵の底に就て夫妻を結成し、十箇月を經て一皮袋を生み、中より十人の童男、九人の童女が生れ、杵底に就いて松梅二杵を拜し主となしたとある。(高平省原平州蠻書)

彼等の用ふる杵は竪杵であるから柱に等しい、この柱の下に就て婚するといふ一條は、やはり柱を立てて妻を選ぶ春時の祭儀の影響を受けてをるのではないかと考へられる。もし叙上の二例の柱又は杵が季節祭に於ける立柱と關係ありと云ふ予の推定が幸ひにして容認されれば、シナ南方原住民のうつぼ舟漂蕩型洪水傳說――創世神話を兼ねたと思はれる此傳承に於ける槽型樂器又は瓠が水の上を漂蕩すると云ふ構想も恐らくまた季節祭との聯關に於て考察せらるべきものではなからうか。柱がファルスと聯想せられる樣に木槽は一面に於てヨーニの象徵として、また瓠や瓜もその物自體の形態からヨーニと聯想される。從つて陰性のものであり、水と關聯あるものと考へられてくる。更に母系的社會性の發達した南方原住民の間に於て此等のものに宇宙の根元たる母性の象徵を考へることが推測される。

その上古代シナに於ける如く春祭に於ては水邊に於て魂を招く祭儀が行はれたと云ふこと、また水邊の禊浴に舟や瓠が浮揚具として用ひられたらしいこと、(九)かういふ中空ろの物が魂の容れ物として相應しかつたことを考へに入れる必要がある。また東南アジアの住民の間には古くから卵や南瓜、竹等より人祖の出自したことを傳へる信仰が存してをり、その一部はトーテミズムとも關聯を持つてゐたやうで、例へばラルン族の間に白南瓜、ガロ族の間には南瓜、カシ族の間では樫の木樹などがトーテムとなつてをる。(十)夜郎國の竹王傳說はかういふ植物トーテミズムの遺存と關係あるのではなからうか。廣西のロ、族の間にも竹から人が出る話が傳はつてをる。

季節祭殊に新年の祭は世界の初まりの說話に聯想されがちである。イザナギ、イザナミ二神の天降り神話は、原始水洋の開闢傳說にタイ、マライなどと同系の天降傳說とが接合され、それに春の祭の立竿旋舞の風が影響して天の御柱をめぐる挿話などがつけ加へられたとみられるが、東南アジアの原住民の開闢傳說もかういふ太初に世界は水に蓋はれてゐたと云ふ原始水洋の開闢傳說に春の祭やその他の祭儀に槽や瓠などの用ひられることや、植物祖先の話などが影響し、渺茫たる水の上に圓いふね又は瓠等の中空ろの箇體が浮び、その中に人祖が入つてをるといふ傳承が發生し、次第にうつぼ舟漂流型洪水傳說に發展していつたのではなからうか。

季節祭が競爭的の要素を伴ひ、新舊勢力の交代が神々の鬪爭を模擬する演戲によつて象徵せられをり、集團的の競技によつて競はれたりすることは云ふまでもない。男女の集ひさへ、競爭的な一面を示すことグラネー氏の其著「シナ古代の祭と歌謠」二〇六頁の中にその理由がよく說明されてをる。平素孤立して離れ離れになつてゐた部落の者達

が季節祭の時急に集團の世界に入り、先づ競爭、反撥の感情が相互に喚起され、競技や嘲弄の形式で競ひ合ひ、最後に平和的な協力、友好、戀愛に終る。

魯の春祭は水より出る龍に象る集團的行事が行はれたと云はれてをるが、（グラネー、前引書、一五八頁）新來の神と既存の追はるべき神とが異なる動物によつて象徴せられてをり、競技的な祭儀によつて演ぜられてゐたとすれば、季節的に增水、洪水を伴ふ地方では洪水の生因をさういふ動物又は神々の鬪爭の結果生起したものと考へることが豫想せられる。安南の紅河の年々の洪水を說明して安南人は山精と水精とが文郎國々王である雄王の娘を競ひ、水精が敗れたので水族を率いて大水を起して迫り、爾後年々紅河の洪水が起り、山と水とが相爭ふのだと云つてをる。

マライ半島のベシシ族の間に古々椰子の幹の樣に太い角のある大蛇がみなかみより出でて海に向つて下つて行き、之に對して海の神聖な大蛇が、陸に上つて來て兩者大爭鬪を演じ、とゞのつまり陸の大蛇の方が敗られ、海から來た大蛇の勝利に歸するといふ歌が存してをるが、（拙著「古代文化論」一一八、一一九頁）同じくサカイ族の間に黑王女といふ海の精は一年の半分は海のそきへに住し、モンスーンと共に上陸し、水田を邪靈から保護する力ありと信ぜられてをる。かういふ水界から來る神の存在、それが或る場合動物の形をとつたことを考へに入れると、季節による支配權變化の信仰と相まつてこれが神々の鬪爭說話に發展し、更にそれが開闢神話に變つていつたことが推定される。中國に於ける鬪爭的洪水說話もかういふ季節祭との交涉關聯から考察せられねばならぬ。この神話形式に外部、恐らく西方からの影響のあつたことは將來また違つた觀點から考察せらるべきであり、その前に吾人はまづその內部的生因を考へてみなければならず、殊にアジアに於て古い居住民を代表すると考へられるオーストロアジア族、及びチベット・ビルマ族、さういふ前住民の殘存を多分に含んでゐると考へられる苗猺族などの神話、生活形態などと充分比較して考察しなければならぬ。マスペロ氏の主張したタイ族神話との比較は勿論大切であるが、タイ族以外になほ一層原初的な關聯を示す一聯の原初文化の存在を吾人は忘れてはならないのである。

註

（一） J. Frazer, Folklore in the Old Testament, vol. I. London, 1918. Henri Maspero, Legendes mythologiques dans le Chou king, (Journal Asiatique, Janvier-Mars, 1924)

（二） 淮南子、禹治二鴻水一、通二轘轅山一化爲レ熊、謂二塗山氏一曰、欲レ餉聞二鼓聲一乃來、禹跳レ石誤中レ鼓、塗山氏往見レ禹方作レ熊、慙而去、至二嵩高山下一化爲レ石、方生レ啓、禹曰、歸二我子一、石破二北方一而生レ啓（楚辭補註三）

（三） 「肱」はマスペロ氏「指」と譯してをる。

（四）A. Van Gennep, La Formation des Legendes, Paris, 1910.

（五）The Mythology of All Races. vol. Oceanic, by R. B. Dixon, Boston, 1916.

（六）安南の傳說に、或る男が每日大木を伐り倒すと翌日もとの通りになる。そこで男が夜隱れてゐると老人が出て來て竹杖で木を指すと木が元の通りになる。男が之を詰問すると、自分は此の山の精で上帝の命を受け、此の山の守となつてをる。此の木は梧桐寶樹と云ひ、本山の主で、聖木だから自分は之を助けるのだと之ふ。男罪を謝し、その杖を請ひ受け、此の杖の德で牧童の殺した死蛇を助け、その親に報はれ、富裕になると云ふ話がある。（公余捷記、傘圓山靈神傳記、拙稿「古代安南の傳說」亞細亞研究、昭和十八年九、十月合併號四八、四九頁）

（七）Lunet de Lajonquiere, Ethnographie du Tonkin septentrional, Paris, 1906.

（八）山海經十四にも「女丑有二大蟹一廣千里也」とある。

（九）M. Granet, Fetes et Chansons anciennes de la Chine, Paris, 1919, p. 101, 102, 106.

（十）Frazer, Totemism and Exogamy, vol. II. p. 292, 324.

（十一）述異記上、和州歷陽淪りて湖と爲る。昔書生あり、一老姥を過ぎる、姥之を待つに厚し、生姥に謂ふて曰く、此縣門石龜眼血出づれば此地當に陷りて湖爲らんと、姥後數往いて之を視る、門史姥に問ふ、姥具に之に答ふ、吏硃を以て龜の眼に點す、姥見て遂に走つて北山に上り、城を顧れば遂に陷る。今湖中明府魚奴魚婦魚有り。

なほ淮南子淑眞篇に先れ歷陽の都一夕にして反て湖と爲るとあり、高誘の註に淮南國の縣名今江都に屬すと云ひ、大體前者と同樣の話を錄してをる。また後漢書西南夷傳邛都夷の註に李膺の益州記を引き、邛都縣城の陷りて湖と爲つた話を傳へてをる。

（十二）笙に就ては瀧遼一氏「笙及び竿についての一考察」（考古學雜誌廿九卷八號、十號、昭和十四年八月、十月）參照。

（十三）サヴィナ師の苗族史 Histoire des Miao, Hongkong, 1930 の二二四頁から二二五頁にブーグェ P.Bougouet 師の通信として雲南の苗人の行ふ春の祭に就て左の如く記してをる。「新年の劈頭五日間 tchai houa chan（「山の花を踏む」の義）と云ふ式が行はれる。之は豐饒の柱を建てた山上に於ける若き男女の集ひである。

苗はこの木が不姙の女に豐沃を與へる力を持つてゐると信じてをる。若き男達が先づ此の木の周圍で creng と云ふ笛を奏し、次に男女達が、低聲に放縱な歌を合唱する。祭が終つて後木柱は子授けのため不姙の家族の所に持參される。（參照拙稿春の祭と柱「民俗學」五卷三號、昭和八年三月、一九〇頁）また黔南識略に「花苗孟春男女を野に合す、之を跳月と謂ふ、平壤を擇み、月場と爲し、冬青樹一本を以て地上に植え、綴るに野花を以てし、名づけて「花樹」と曰ふ、男女豔服蘆笙を吹き、踏歌跳舞し、樹を繞る三匝、名づけて「跳花」と曰ふ、跳り畢り、女歡ずる所を視、或は帶、或は巾、之と相易へ、之を「換帶」と謂ふ、然る後媒妁を通ず、聘資を議する姸媸を以て盈縮と爲す云々。」（嶺表紀蠻七五頁）